

佳作

夏の挑戦

静岡県 静岡県立韮山高等学校一年 加藤舞

七月ももう残り少ない日の午後。生ぬるい水の中で、私はぶくぶくと息を吐く。手を伸ばす。足も伸ばす。顔を水面に上げて大きく息を吸う。そしてまた顔を水中に……というところで足が底につく。ふはあっと慌てて顔を起こした。口の中に水が入ってむせ返っていると、隣のレーンをゆるやかに泳ぐ同級生たちが私を追いこしていく姿がよく見えた。まったく、プールは嫌いだ。

私は海のある地域で育っているが、小学校も中学校もプールの授業がほとんどなく、高校一年生の夏が初めての本格的なプールの授業だった。家族と海に行ってもただ浮き輪で浮いていることで満足していた私は、泳ぎ方さえ知らなかった。初めて五十メートルプールを見たときには思わず立ちすくんでしまった。さらにその中を平然と泳いでいく同級生たちを見た時には不安で胸がいっぱいになった。「私に泳げるわけがない」。そんな思いばかりが募っていた。

当然、授業内で泳げるようになることはなかった。し

たさせているだけだっただろう。そんな私はまず、力を抜いて浮く練習からのスタートだった。

二日目。初日の私の様子を見ていた体育の先生は私に、平泳ぎに挑戦することを勧めた。

「足はきれいに動かせてるんだよな。」

と、先生は何度も言ってくれたが、私にはどうやって手と足のリズムを合わせるのかわからない。先生がひとつひとつ丁寧に教えてくれる。しばらくすると、また違う先生が来てこう言った。

「まずは五メートル泳いでみよう。絶対足は着けるな。」

言われるがままに足を着けないことだけを考えて、必死に手足を動かした。苦しくなって顔を上げて後ろを振り返ると、壁から五メートルの赤い線が見えた。

「やった！ 進歩した！」

泳げていたかとはともかく、五メートルの線を超えたことが嬉しくて、気分が上がった。「よし、この調子だ。次は十メートル」。そうして、私はこの日、五十メートルを三回足を着いて泳ぐまでに進歩した。

「自分では、泳ぎ方がわからないと思っていただけ、意外と慣れてきているのかも」。最終日を前に、少し自分を信じてみる気になった。

そして、次の日。はりきって、水の中に入ったが、最初は昨日よりも苦しかった。だけど、泳ぐしかない。今までに教わったことを思い出して、やりきろう。そう思

かし、学校の決まりで五十メートルを平泳ぎかクロールのどちらかで泳ぎきれない者には三日間放課後に補習があった。聞くところによると、補習を受けて五十メートル泳ぎきらなかった生徒はここ五年間で誰もいないという。そんなことがあるのかと耳を疑うような話だが、実際に補習を受けたのは私を含めた五人である。その中からも一人、また一人と五十メートルを泳ぎきって合格していき、残ったのは私ともう一人だけになった。彼女は私と同じくプールの授業のない学校に通っていたので泳げなかった。私は以前から彼女と登下校の際に一緒にいることがあって気軽に話をすることができたのでほっとした。そんなこともあって私は、「どうせ泳げるようになるんじゃない」という諦めと、「泳げるようになったらラッキーだ」という気持ちで半分ずつ持って樂觀的に補習に取りかかった。

初日は、とりあえずたくさん泳いでみようと思った。慣れてくれば少しは進歩するかもしれない。クロールは最初はよかった。プールの底が動いているように見えて、自分の体が前に進んでいることがわかる。しかし、息継ぎがどうしてもだめだ。顔を上げると同時に手を下に下げてしまう。そこからなかなか抜け出せない。次に平泳ぎをやってみる。周りを見ていると平泳ぎの方が楽なように思えた。しかし、実際にやってみるとそう簡単にはうまくいかない。私は、端から見ればただ手足をじたば

って五十メートルに挑戦したが四十メートル程で足を着けてしまった。一方で、もう一人の挑戦者である彼女はとうとう五十メートルを泳ぎきった。それを見たら、私も挑戦し続けるしかなかった。一人、泳げなくて残るのが嫌だというよりも、私も泳げるようになりたいと強く思った。ゆるやかに水をかいて進みたいと思った。

壁を蹴る。進む、進む、進む。考えなくても進むから、進む。途中で疲れてきた。進まなくなってきた。

「やめるなよ！ 絶対にやめるな！」

先生の声が聞こえた。そうだ、やめなければ進む。あと、ちょっと。ちょっとしか進まないけど、ちょっとでゴールだ。そして、やっと私の指先が壁に着いた！